
モクタリ 明子 (もくたり あきこ)



【書名】村上朝日堂シリーズ

【著者】村上春樹

【発行】新潮文庫

皆さんの中にも、村上春樹の小説を読んだことのある人はたくさんいるだろう。ここでご紹介するのは、彼のエッセイだ。「揚げたてのドーナツの話」「苦情の手紙の書き方」「体罰について」「猫の不思議」など内容は実に様々だが、「新鮮なものをしっかり食べて、しっかり運動して、しっかり眠っていれば、人間大抵のことは乗り越えられる」というメッセージが、繰り返していくつかのエッセイ本に現れる。若いときには「何もかもいやだ!」と自暴自棄になってしまうことがある(私にはあった)。規則正しい生活をする、という当たり前のことが、案外自分をどん底から救ってくれるのだ。

村上春樹は、国際的な文学賞の授賞式などで、英語でスピーチをすることがある。イスラエル最高の文学賞であるエルサレム賞の受賞式では、“If there is a hard, high wall and an egg that breaks against it, no matter how right the wall or how wrong the egg, I will stand on the side of the egg.”と語りかけた。勇気ある発言である。昔からどれだけ批判されようと、一切反論することなく、黙々と小説を書き続けてきた彼の強靱な精神力が、「食事・運動・睡眠」からきているのかと思うと、規則正しい生活を侮ってはいけないと改めて感じる。

【書名】エデュケーション 大学は私の人生を変えた

【著者】タラ・ウェストバー (村井理子 訳)

【発行】早川書房

モルモン教原理主義者の両親のもと、6人の兄弟姉妹とともに育ったタラは、政府に洗脳されるとの理由から学校にも行かず、また命にかかわるよう大怪我をしたとしても病院に行くこともなく、やがて訪れる「世界滅亡の日」に備えながら子供時代を過ごした。知的好奇心の強かった兄タイラーの影響で、奇跡的に大学に入学したタラは、初めて教育を受ける中で、自分の育った環境の異常さに気づいていく。やがて大学生活にも慣れ、新しい人生を順調に歩んでいるかのように見えるタラだったが、両親との考え方の違いを消

化することができずに苦悩の日々を送る。

本書は、最終的にはケンブリッジ大学で歴史学の博士号を取得したタラの回想録である。出版後、本書はベストセラーとなり、タラは多くのテレビ番組にも出演した。ところで、感銘を受けた本の著者が英語話者である場合（或いは自分が学習している言語の話者である場合）、是非インタビュー動画などをチェックしてみたい。内容が分かっている分、話が耳に入ってくるやすいし、何よりも興味のある人が、興味のある内容について話しているのを聞くことは、最高の語学学習である。

タラほど極端ではないにしても、狭い世界・世界観に囚われてしまうことは誰しもあるだろう。そこから抜け出すには教育が大事であり、読書は自分を“Educated”（=原題）な人間にするために必須であることを気づかせてくれる作品である。

【書名】 活きる

【著者】 余華（飯塚容 訳）

【発行】 中公文庫

大学3年生の時に『活きる』を読んだ。読んでいる最中、頭の中で何かがガラガラと音を立てて崩れ落ちるような気がした。読後は、自分の周りの世界が全く違って見えたような気がした。それまでクヨクヨ悩んでいたことを、すっかり忘れてしまった。あなたが幸運ならば、自分の人生観を変えてしまうような強烈な本に、一生のうちに何度か出会えるかもしれない。そのためには、常にアンテナを張り巡らし「これだ！」と思う本を手にとってみるしかない。それも若いうちに。

本書は、共産党軍と国民党軍の内戦、大躍進政策、文化大革命と、激動の時代の中国を駆け抜けたフークイとその家族の物語。これでもかというほどの不幸が、次々とフークイたちに襲いかかる。それでも彼らはとにかく力強く前を向いて生きていく。胸が張り裂けるような辛い話だが、登場人物がユーモアいっぱい描かれており、不思議と心が温まる。

外国の小説を読んだときに、これまで味わったことのない雰囲気を感じることがある。皆さんが『活きる』を読んだなら、例え中国に行ったことのない人でも、その圧倒的なエネルギーをひしひしとを感じるだろう。

余華の他の作品『兄弟』や『死者たちの七日間』も非常に読みやすい。また、『活きる』は、チャン・イーモウ監督によって（だいぶマイルドになってはいるが）映画化もされている。是非自分の世界を広げるためにも、色々な方法で異文化に触れてみてください。

【書名】生まれたことが犯罪！？

【著者】トレバー・ノア（斎藤慎子 訳）

【発行】英治出版

南アフリカ出身のコメディアン、トレバー・ノアの自叙伝。白人の父親・黒人の母親を持つ1984年生まれの彼は、アパルトヘイト下の南アフリカではその存在自体が犯罪だったことからついた書名（原題はBorn a Crime）。人種隔離政策という重いテーマが根底にあるにもかかわらず、それを徹底的に揶揄するトレバーの言葉に思わず吹き出してしまう。

「完璧な人種隔離政策」と言われたアパルトヘイトだが、根本的に筋が通っていない。例えば、当時日本人は白人扱い、中国人は黒人扱いだった。なぜかというと、南アフリカ政府は日本車や日本製の電化製品を輸入するために、日本とは良い関係を築きたかったから。めちゃくちゃである。

また、本書を読んでいると世界の「価値観」がいかに西洋文化に根付いたものかを実感する。現在トレバーは、アメリカのテレビ番組The Daily Showの司会を担当している。様々な社会問題について語る彼の視点は、とても新鮮だ。ちなみに南アフリカでは英語も公用語の一つである。トレバーの話す南アフリカ英語は、私たち日本人にはとても聞きやすい（と思う）。是非The Daily Showもチェックしてみてください。

【書名】キャッチャー・イン・ザ・ライ

【著者】J. D. サリンジャー（村上春樹 訳）

【発行】白水社

3回目の放校をくらった17歳のホールデンが、寄宿学校から自宅に帰りつくまでの数日間を回想する物語。「なんて向こう見ずな若者だ！」と最初は思うのだけど、徐々に彼がとても繊細で、汚い世の中に耐えられないほどの純粋な心の持ち主であることが、そうとは微塵も感じさせないような口調で語られるエピソードから明らかになってくる。そのギャップの説得力といたらない。

読書の価値が問われることが増えてきた現代社会だが、自分とは異なる立場にある人の気持ちを理解するのに、読書ほど最適なものはないと思う。自分が年をとり、年々分からなくなることが増えた学生の気持ちも、本書を読むたびに少しだけ、より理解できるようになった気になる。

ここでは村上春樹の新訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』をあげたが、野崎孝の『ライ麦畑でつかまえて』も有名。どちらも素晴らしい訳だが、本書に興味を持った人は是非原書にもトライして欲しい。一人称がいくつもあつ

たり、文末の助詞を見ただけでそれが男性の発話か女性の発話かが分かったりする日本語は、英語よりも表現豊かであるという意見を耳にすることがある。ホールデンの話し方のリズム、とりわけ何度も使われる、さして意味のない“when you think about it” “and all that crap” “for Christ’s sake”などの醸し出す雰囲気や掴めてきたら、「英語だって表現豊かである。ただし、日本語とは異なる方法で。」ということが実感できる。